島根県立
益田高校

導入期指導

導入期指導の徹底と地域との連携を通して未来を切り開く力を育てる

◎「知性に富み、心身共に健やかで、自らの力で未来を切り拓く生徒を育てる」を教育目標として、生徒一人ひとりの「学力保障」「資質保障」「進路保障」を目指す。2004年度にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の指定を受け、理系人材の育成にも力を入れる。

設立
1912（明治45）年

形態
全日制／普通科、理数科／共学

生徒数
1学年約200人

10年度入試合格実績（現浪計）
国公立大には、京都大、大阪大、神戸大、島根大、岡山大、広島大、山口大、九州大、島根県立大、県立広島大などに 146 人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、中央大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大など延べ 128 人が合格。

住所
〒698-0017
島根県益田市七尾町1-17

電話
0856-22-0044

Web Site
http://www.masuda.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎高校生になりきれない生徒が増え、中高のギャップを克服させる必要性が高まる
STEP 1

実践
◎導入期指導、学習記録、面談などで生徒の学びへの意欲を高めると共に、SSHを契機に地域連携を深める
STEP 2

成果
◎国公立大合格者が過去十数年で最高の実績を記録。SSHにより地元の良さを再認識する生徒が増加
STEP 3

中学校と同じスタイルで学習に取り組む生徒たち

島根県西部を代表する進学校である島根県立益田高校は、2010年度入試で著しい躍進を遂げた。過去10年、約80～90人で推移していた現役国公立大合格者が125人を記録。合格率も64・8％と09年度の55・9％を大きく超えた。

例年に比べて、入学時の学力が高かった学年というわけではない。他の多くの高校と同じように、同校も生徒の気質変化に戸惑っている。進路指導部長の長岡正和先生は、自校を次のように分析する。

「学習習慣が身に付いていないまま入学する生徒が多く、学力の幅は年々広がっています。元気はあるけれども、基礎学力の定着していない生徒が増え、年々手を掛けなくてはならなくなっていることを感じます」

中でも悩みの種は、中学校の学習の延長で高校の学習に臨む生徒が多いことだ。生徒の中には中高の壁に悩み挫折感を味わう者もいる。1学年主任の村岡英子先生は言う。

「多くの生徒は大学進学を希望しますが、その気持ちと勉強の必要性が結びついていないように感じます。学習といえば定期考査対策というような認識しかないため、高校に入学して自分より勉強の出来る友だちを目の当たりにして、初めて勉強とは何だろうと考え、

壁に突き当たる生徒は大勢います。高校生らしい学びに向かわせること、いかに早く目標を持たせられるかが指導のポイントになると考えています」

「益高生」になることが生徒たちの最初の課題

こうした課題を受け、ここ数年同校が力を入れているのが導入期指導だ。

島根県立益田高校
長岡正和 Nagaoka Masakazu
教職歴26年。同校に赴任して3年目。進路指導部長。「何事も気力、体力、精神力」

島根県立益田高校
福井文生 Fukui Fumio
教職歴25年。同校に赴任して7年目。SSH担当。「Take it easy」

島根県立益田高校
大庭荘平 Oba Shohei
教職歴17年。同校に赴任して3年目。教務部長。「仏作って魂入れる」

島根県立益田高校
村岡英子 Muraoka Eiko
教職歴14年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「常識にとらわれず、自分の頭で考えて行動すること」

「中学校で学び合いやグループ学習などを経験しているためか、最初は高校の授業スタイルに慣れない生徒も多くいます。入学時に『学び方』を伝えることで、生徒の意欲を喚起し、学ぶ態度を早急に育成する必要性を感じていました」（長岡先生）

導入期指導の柱は、3年前に始めた「新入生橋渡しウィーク」だ。入学直後の1週間に、オリエンテーション、服装・挨拶指導、学習の仕方や授業の受け方などの学習ガイダンスを行う。狙いは、中高の円滑な接続の実現だ。学習面では、国語、数学、英語をそれぞれ2時間以上、他教科は1時間ずつ当て、授業計画や方針、評価方法の説明を行う。

特に重視するのは、「益高生」としての自覚を持たせることだ。「新入生橋渡しウィーク」の最初の土曜日には学年集会を開き、取り組みの意義を伝え、生徒部、進路指導部、教務部などの各分掌が「益高生」としての心構えを説く。

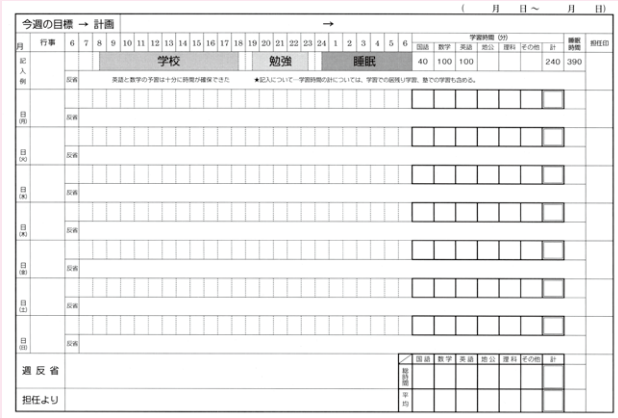
また、「新入生橋渡しウィーク」は教師の決意表明の場でもあると、長岡先生は話す。

「『自らの未来を自らの手で切り拓く力を身に付けた人材』というのが、教師が求める益高生です。そのために教師は、進路実現に必要な学力（学力保障）、勤労観や生き方の確立（資質保障）、将来の目標に応じた進路の実現（進路保障）に向けて、生徒をしっかり支援していくことを表明するのです」

教科ごとの学習時間を把握し指導の改善に生かす

「新入生橋渡しウィーク」で培った学びへの意欲を、実際の学習活動につなげることにも力を入れる。「私のキセキ（軌跡・奇跡）」は、各教科の学習時間や食事、睡眠など生活全般を確認するための生活記録で、入学時から3年間、毎日朝のHR時に記入し、提出させている（図1）。家庭学習の時間や教科のバランス、就寝時間などをチェックし、教師は個々の生徒の変化を把握する。

図1 「私のキセキ」



学習時間だけでなく、就寝時間も記入させ、無理をしていないか確認する
＊学校資料をそのまま掲載

「私のキセキ」は、学年全体の課題を把握する上でも欠かせない取り組みだ。年10回、新学期開始直後、定期考査直後、長期休暇前、高校総体の県予選直後など、生徒の学習習慣が乱れがちな節目となる時期に、生徒全員の1週間分の学習時間を、担任と副担任がパソコンに入力。学年ごとに、学年全体と各学級の学習時間、それぞれの教科の学習時間などを集計し、学校全体で共有する。

データのうち、特に着目するのは学習量の教科バランスだ。教務部長の大庭荘平先生は次のように説明する。

「どの教師が受け持っても、同じレベルの指導が出来るよう、教科全体の指導力を高めていくのが狙いです。年度当初なのに特定の教科だけ学習時間が少ない、平日の学習時間に比べて休日の学習時間ばかりが多い、3年生になっても理科や地歴の学習時間が増えていないなど、教科ごとの課題を浮き彫りにすることで、教科担当が授業の進め方や課題の出し方、生徒への意識づけなどを見直すきっかけとなっています」

データは、学級経営にも有用な情報を提供している。他クラスに比べて学習時間や睡眠時間が少ないといった生活の乱れが見られれば、担任から生徒にさまざまな声掛けや意識づけを行う。担任自身が気持ちを引き締める契機にもなっているのだ。

情報は教師が調べて伝え生徒の信頼と意欲を高める

教師が足並みをそろえ、全員体制で指導に臨んでいることも、同校の躍進を支える重要な要素だ。学年集会では、定期的に進路情報の提供や進路意識を高めるための講演を行うが、外部から講師は招かず、すべて同校の教師が自分で調べた情報、経験を基に生徒へ投げかける。学年通信では、B4用紙両面分のエッセイを教師全員が輪番で執筆する。学校行事や定期考査など直近の話題を中心として、自身の高校時代の体験、時事問題なども交えながら生徒にエールを送る。

生徒把握や意識啓発のために、面談も頻繁だ。「私のキセキ」や進路希望調査、模試結果などを基に、生徒1人当たり年7、8回は行う。もちろん、気になる生徒がいれば日常的に話を聞く時間を設ける。授業前の時間や昼食の時間を割いて面談に当たる教師も多い。

「本校では、進路講演や学年通信、面談など、教師が自ら調べたり、生徒に語り掛けたりする場面が多い。このことが教師や学校に対する生徒の信頼感を高め、実績に結びついているのではないでしょうか」（長岡先生）

指導に時間と手間を惜しまない教師の意欲、その期待に応えようとする生徒の思いが、同校の活力を生み出している。

地域に焦点を当てたSSHで地元の良さを再認識させる

生徒自らが将来の目標や志望を見いだし、未来を切り開く力を高めることも同校の重要なテーマだ。その点で効果を挙げているのは、04年度から指定を受けているSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の取り組みだ。07年度には更に5年間の継続指定を受けた。同校のSSHのテーマは「地域連携」だ。SSH担当の福井文生先生は、その背景を次のように話す。

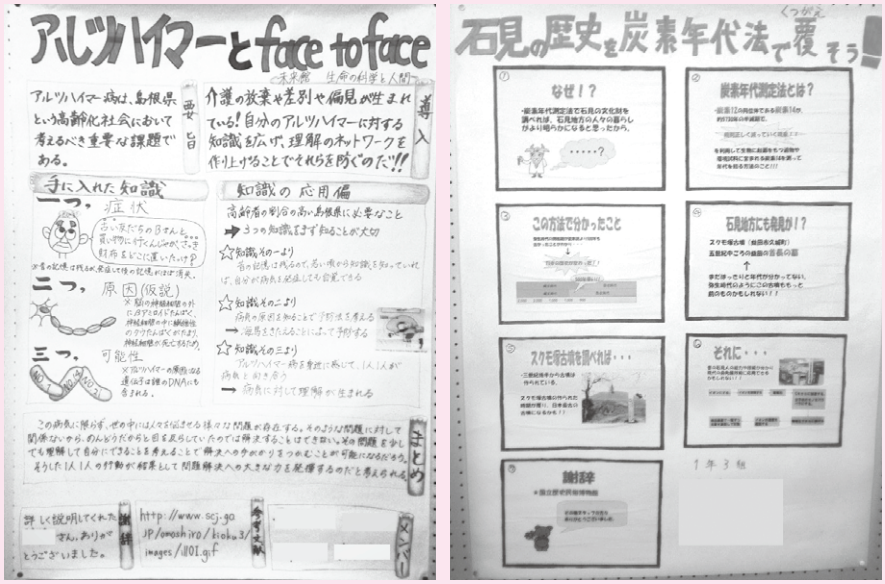
「益田市の中心産業は農業や漁業、商業であり、数十年前から人口の流出が進んでいます。一昨年には卒業生の9割が県外に出ました。また、地域に大学や研究施設がないため、理数教育への関心を育てるのが難しい面があります。最先端の科学に触れさせ、科学への興味を深めると共に、『地域の素材』を積極的に取り入れることで、地元の良さを再認識させたいと考えています」

同校のSSHは、1年次必修の学校設定科目「サイエンスプログラム」により、文系・理系を問わず、生徒全員が参加するところに特徴がある。7月の地域巡検では、地域のさまざまな科学施設を9コースに分かれて訪問。12月の東京実習では、首都圏の大学、研究機関、企業など、3～4施設を訪れて、見学や体験学習を行う。更に、理数科の生徒は、2年次10月の大学

連携実習で島根大、広島大、山口大を訪れ、講義・研究実習に参加する。いずれの活動も、連携先から事前に課題を受け、調べ学習を行い、連携先に報告。その後、訪問して実習を行い、成果を校内で発表する（図2）。

「例えば、近年、弥生時代の年代が従来の定説よりさかのぼっているのは、新たな発掘や科学的な分析の成果です。実際に研究している専門家からそうした話を聞くことで、生徒は文系・理系の垣根が無くなりつつあることに気づきます。また、今学んでいることが最先端の研究に結びついていると気づけば、たとえ苦手教科の学習でも興味を持って取り組めるのではないでしょうか」（福井先生）

図2　「サイエンスプログラム」の成果発表で生徒が作ったポスター



「サイエンスプログラム」で調べたことをポスターにまとめ、発表会を行う
＊学校資料をそのまま掲載

教師一人ひとりが「授業のプロ」を目指して

10年3月に卒業した学年のうち、理系志望者は1年生時点で学年全体の4割だった。それが、2年生で5割、3年生では6割まで増えた。アンケートの自由回答では、「地元が都市化すれば良いと思っていたが、自然豊かな県として発展させるべきだと思うようになった」「都会に行くことしか頭に無かったけれども石見の良さを再発見できた」といった声が寄せられた。

施設への引率などは副担任を含め学年の全教師が担当するため、学年団の結束を固めるきっかけにもなったという。

今後の課題は、教師一人ひとりの授業力を高めていくことにある。

「SSHを通して、生徒は自分で調べて発表する経験を積んでいますが、通常の授業でもそうした場面を増やしたいと考えています。教師も生徒も定期考査や模試で良い点数を取ることを意識しがちです。しかし、SSHの成果を踏まえて、授業の中でも人間力を高めるような指導を取り入れることが、新学習指導要領の理念を実現する上でも重要だと実感しました」（大庭先生）

授業力向上は学校全体の課題と認識し、若手教師に大学入試問題を解かせるなどの施策が具体化しつつある。また、地域との連携も生徒育成のポイントになると、長岡先生は強調する。

「生徒の夢をかなえるためには、本校の力だけでなく、今後は小・中学校との連携など地域全体の教育力を高める取り組みが大切になるでしょう。10年7月には、中国地方のSSH指定校と連携して、地域の子どもを招いて科学講演やポスター発表、出張講座などを行う『益田さいえんすたうん』を開催しました。今後もこうした取り組みを積極的に打ち出し、地域全体で子どもたちの夢をかなえられるような街づくりに貢献していきたいと思っています」

益田高校で育まれた教師の団結は、地域社会へも広がり始めているようだ。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2009年12月号指導変革の軌跡「茨城県立竜ヶ崎第一高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）